

2 イチジク凍害後の減収は密植栽培によって早期回復できる

ねらいと成果

イチジク「柵井ドーフィン」は低温に弱く、凍害によって地上部が枯死し大きく収量減となることがある。これを早期に回復させるため、密植の効果を検討した。その結果、密植するほど収量の回復は速く、2年で凍害前の80%まで回復することを明らかにした。

内容

株間0.8m、2.0m、4.0m（慣行）の間隔に栽植したイチジク「柵井ドーフィン」6年生樹を供試した。このうち、2005～2006年冬の凍害発生樹各3樹の枯死した主枝を切除し、残った主幹から発生した新梢を4本残し結果枝とした。2007年は、0.8m区は結果枝4本をそのまま1、2芽で短く切り返し結果母枝とし、2.0m区、4.0m区は2本の結果枝を主枝として残し、再度一文字整枝樹に仕立てた。

凍害前（2005年）のイチジク樹の生育は、栽植密度が高いほど新梢が強かったが（表1）、10a換算収

量に差はなかった（表2）。しかし凍害直後の2006年は、2.0m、4.0m区で強い切り戻しのため2005年より樹勢が強くなった（表1）。各区とも着果開始節位が高くなったため、収穫開始も前年より大幅に遅れ、9月下旬となった（表1）。1樹当たり収量は、各区ともほとんど同じであるが、10a換算収量は密植した0.8m区が最も多かった。それでも収量は凍害前の1/2以下であった（表2）。

凍害から2年目（2007年）の生育は、栽植密度が高いほど樹勢が強く、また収穫時期も前年より早くなり（8月中下旬）収量は0.8m区、2.0m区では凍害前の80%に達した（表1、2）。また、各年次とも果実の大きさや糖度に差はなかった（表2）。

普及上の注意事項

残った主幹部は樹幹害虫等が寄生しやすいので白塗剤や切り口癒合剤で保護に努める。

真野 隆司（農産園芸部）
（問い合わせ先 電話：0790 - 47 - 2424）

表1 栽植間隔が凍害発生前後のイチジクの生育に及ぼす影響（2005～2007）

栽植 間隔	新梢長(cm)			着果開始節位			収穫期(月/日)		
	2005	2006	2007	2005	2006	2007	2005	2006	2007
0.8m	139.3 a	145.3 a	137.4 a	3.6 a	6.5 a	5.7 a	8/15～11/14	9/17～11/22	8/19～11/20
2.0m	108.7 b	148.6 a	125.0 ab	3.6 a	8.0 a	6.0 a	8/12～11/16	9/26～11/22	8/21～11/20
4.0m	86.0 c	152.0 a	106.8 b	3.2 a	7.5 a	6.5 a	8/13～11/14	9/25～11/22	8/21～11/20

表2 栽植間隔が凍害発生前後のイチジクの果実品質と収量に及ぼす影響（2005～2007）

栽植 間隔	果実重(g)			1樹当たり収量(kg)			10a換算収量(kg)		
	2005	2006	2007	2005	2006	2007	2005	2006	2007
0.8m	63.8 a	63.4 a	67.7 a	3.77 c	1.60 a	3.09 c	2615.5 a	996.9 a	2145.8 a
2.0m	64.0 a	62.9 a	68.9 a	8.40 b	1.32 a	6.91 b	2333.0 a	329.4 b	1919.4 ab
4.0m	60.2 a	65.8 a	67.2 a	16.62 a	1.82 a	11.96 a	2307.7 a	227.5 c	1661.1 b

表1、2ともアルファベットの異符号間は5%水準で有意（Tukey）



地上部が枯死したイチジク樹



枯死した主枝を伐採



発生する新梢を主枝に養成